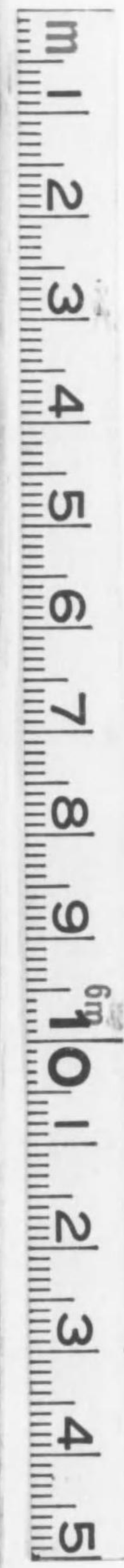
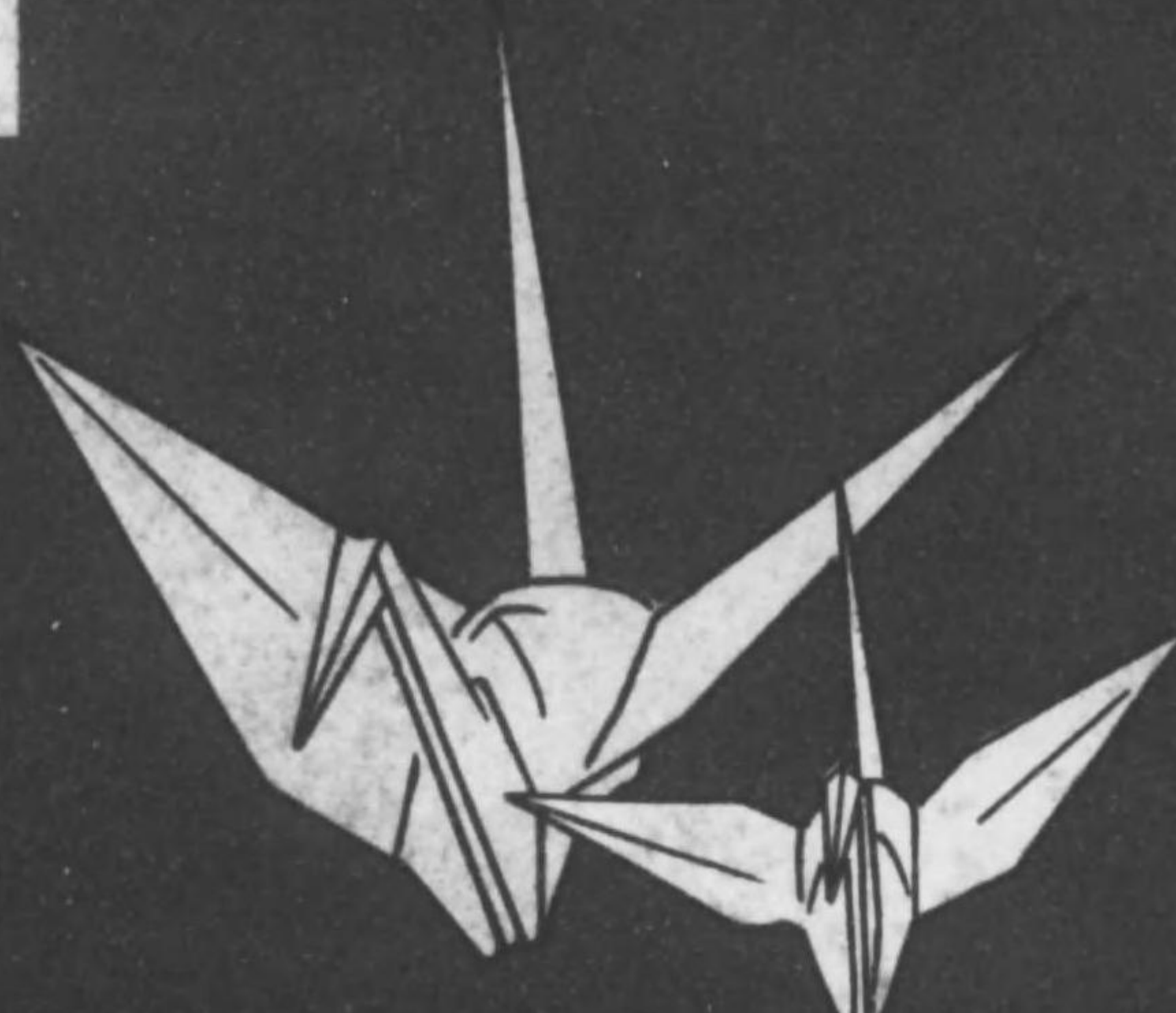


特257

931

端唄小唄百選集



始



特 257
931



貝百選集



二の晩櫻初話春腹葉羽は萩初初は晴張春の色色潮
 上部に し風のぎ織る 出でれり 部つ 糸末
 リ 君 雲らか 主 くは枯 見由子 かな
 新 ば (そよと) けよと らる とき かい出
 内 かにて) き橋やと 枝春てん 演雨 なるて鳥

二 二〇〇 九九八八七七六六五五四四三三 二二一一

端唄小唄百選集

目次

ワ オ ヌ リ ト ホ
 わのを おお男 おお大降粉の 主ぬの 悟のどと 巫土の ほほほほ惚の
 れ部 伊勢伊前 部 部 部 部 部 部 部
 が 指勢よと互津て して 気 せてを のさす(ぎぎすて
 位 ど(語)行 ぼ し なみか通 りせ(今由通
 家 唄)りて生に絵くも とり い てかふ とて(自在ふ

二 二二一一一一一一 一一 一 一一一一 一一一一
 〇 〇〇九九九八八七七 七六 六 五五四四 三三三二二

マ 待の屋や八柳野橋の草口雲のク上の梅裏梅梅梅浮
 てちの屋や八柳野橋の草口雲のク上の梅裏梅梅梅浮
 とわ部台の重橋暮部説かに部り部はのは氣にそせ
 云びばはなきの部下いせと自同もまな
 ふてや壁一か屋は下いせと自同もまな
 なわし着重ら教び葉てしりかやねよ忘春とて

五五 五五四四四四 四四四 四 四四四四四四四
 一一 〇〇九九八八 八七七 六 六六五五五四四三

ア 海縁の 工 小窓に 工 ぶ鈴更筆 フケの
 あ淡秋桂青の 海縁の 工 小窓に 工 ぶ鈴更筆 フケの
 ごの部老か部諸書ほの部 けに部朝部
 でく登の 部のい 工 小窓に 工 ぶ鈴更筆 フケの
 加とに 部のい 工 小窓に 工 ぶ鈴更筆 フケの
 らせ出 部のい 工 小窓に 工 ぶ鈴更筆 フケの
 てもて夜柳 子な 上画葉車掛て りう夜笠 ね

五五五五五 五五 五五五五五五五 五五五五 五
 九八八八七 七七 六六六五五四四 三三二二 一

夕 典定宵夜夜よの 籠香海海堀川重扇並桂かか書の 枝わわ我わ
 手の典定宵夜夜よの 籠香海海堀川重扇並桂かか書の 枝わわ我わ
 部作のにり部晏 わらき部がししか
 おのをの 晏 わて かがが
 枕も川ま 庚の 寺晏 わて かがが
 一し 香 手かく送 恋思國も在
 やば瀬ち梅雨て 鳥水唄寺堀竹風扇車管川さりる はひさの所

三 三三三三三三 三二二二二二二二二二二二二二 二二二二二
 三 三二二二二二 〇 九八八八七七六六五五五四四 三二二二二

ウ ム ナ ネ ツ ソ 薄浮字の 虫むせの 涙の 寝の 月露過綱つ を空室の 館竹玉竹鳥
 薄浮字の 虫むせの 涙の 寝の 月露過綱つ を空室の 館竹玉竹鳥
 名部つ理部か部な部はは部 脚部 已に
 主治のとな くが けはは部 脚部 已に
 てし首 しら け 月尾上離 暗し いた
 じ 墨と原 音て尾 てに と花君煮ぬ ききく 節に瀬川や砂

四四四 四四四 四 三 三三三三三 三三三 三三三三三三
 三二二 一一〇 〇 九 九九八八七 七七六 六六五五四四

端唄 色がある (三下り)

色がある、取知で惚れた横巻茶云ひ出すが
は飽くまで立て、貫はにやならぬぞ。

小唄 一つしかに (本調子)

一つしかに、縁は深川なれそめて、せけば逢ひた
くあはまた、浮名立つかや遠瀬なや、これが
着界ぢやないかいな、とかく浮世は色と淫、うまな
たつともまよのかは、浮いた世界ぢやないかいな。

端唄 喜 雨 (二上り)

喜雨にしつぽり 濡るる雪の、羽根に匂ふ梅の香
や花に散れ、ほらほら、ゆるゆると、いと物
に附定めぬ糸は一つ、おちよ、雪の玉は梅やが
て、身は気儘になるならば、サア雪の梅ぢやない
かいな、サアサなんでもよいわいな。

小唄 張り子の寅 (二上り)

いくらくといても、張り子の寅は、すまいた顔
志す首を振る、なれとその日く、の風次第。

小唄 晴れと雲間 (本調子)

へ晴れて雲間にあれ月の影差のむ後に入黒子儘
台榭の蚊屋の内にお寝いもおや申し雷さんの引きせ。

端唄 はでな由良さん (三下り)

へはでな由良さん、平の鳴る方へとらまへて
さしにーより、とらまへてさしにしよう、藝
者おやまたに手そひかれ、おもはずれを夫にいた
まつきてもそさうな由良さんぢや。

小唄 初出でんよとて (三下り) (松尾よとて替唄)

へ初出でんよとて、出さかけて、先づ頭取の俣達すがた
よい道具持、意氣なほんぶ祖、エ、ずんとまったる様子
の、後鬼ぢや、吹流し、さあさ大の字、ぶら／＼谷めぞき。

小唄 初喜 (本調子)

へ初喜や門に松竹、俣勢踏や注連も松、表
白の鳥追ふ聲もうららかに、悪魔拂ひの獅子
舞や、はづむ手袖の松子よ、突く羽根ついで
一イニウエ、四ツ世の中よいなま、何時も変
らぬ耐え斗は布。

端唄 三枝桔梗 (本調子)

へ三枝桔梗、なかに玉章思はせて月は聖末に字
の露、ををまらぬ、夜毎にすだく、更けゆく
鐘に雁の聲、志はらうーたものかいな。

端唄 はるぐーと (本調子)

へはるぐーと、尋ねてこゝへ紀伊の國、岸う
つ浪の、みまの、順程に信濃河とかかど
にたつのをすぐーと、名のねぬつらまたむせ
るなみだ、あわれぬ屋の、うみの親。

端唄 羽織かきーと (本調子)

へ羽織かきーと、袖ひきとめてどぞもけやは
ゆかんすかど、いひつゝまッてれんぐゝ窓、障子は
そめに引あけて、それるやーやんせ、あまに。

端唄 茶ぶぐーと (本調子)

へ茶ぶぐーと、まどをぬぐれば山ほろぎす、
またも啼くかと待つうち、輕くとオヤいさみ
ぢやと飛んで出る、浮気性ではないかいな。

小唄 葉 檜 (三下り)

葉檜や、月も木の洞をちらくとたたく
水鷄にさそはれて、さくやく聲や苔の船。

小唄 腹の立つとき (本調子)

後の立つときや、茶碗で飲みな、のめど、のめぬ
のめぬ酒をら、すけてもやろがいやなら、酔狂
な、おかーやんせ、おつとそこらかくせつのだねとなる。

小唄 春風がそよ (本調子)

春風がそよくと福は内へとろの存へ鬼は
外へと梅が香添ゆる 雨か雪か儘よ
今夜もあな晩も居残りよ王子酒。

小唄 話し白けて (本調子)

話し白けて、ついついおんと、あけてくぜ
つ夏の月、なみだをぬるおーるいの、あ
れまたなぐか、ほとゝぎす。

小唄 初雲に (本調子)

へ初雲に降込められて向島二人が中に置炬燵さ
さの様嬪の爪弾はぬいた同志の差向ひ煙が浮
世か浮世が実お津くくべの胸と胸。

小唄 移本 (本調子)

へは一本へつけたるや雲のうかれ船、すだれかく
げて二階から、望む田の面に、群在。

小唄 晩に思ば (二より)

へ晩に思ばくせどやの小窓、うつや砦のう
き格子、様はまたかとお窓から見れば、ま
はさまぢらやがお月さま、くよんがえ。

小唄 二より新曲 (二より)

へ悪るめせずとも、そらははなせ、明日の目
ないぢやなし、るめ、そなたの心より、歸ふあな
が、どんたに、どんたに、つらからう。

小唄 惚れて通ふ (三下り)

惚れて通ふにたにこはからう今宵も逢はうと暗
の夜路を唯一人先やほども思やせぬのこちや
死をつめえく山を越えて逢ひにゆくどう
した縁で彼の人に毎晩あうたら嬉しからうつど
うすりや添はれる縁ぢややらうれたいよ。

端唄 ほととぎす (三下り)

時多、自由自在に軍く里は、海屋へ三里豆、宿屋へ
二里と云ふ在あても、精な好いたお方と暮すなら、
末は聖末のこともだれた、身は捨てまのいの身體。

端唄 時多今一聲 (本調子)

ほととぎすいまひとこゑのきかまほく、月は
やゆれどすがたがみえぬ、そ忘れたいなん
とせう、忘んきくさいぢやないかいな。

惚れさせて (二下り) 「惚れ」の「替唄」

惚れさせて、今ぢや先から遠ぶかろ、おれん所
なかにえ、かまふもんか。

小唄 ほんのりと (本調子)

ほんのりと、明けてもくらき朝霧や、島かこれ
行く捨延小舟、たれにこがれてゐるよ
やら。

小唄 土手を渡るは(三とり)

土手を通るは、もーやあの人がちやないかいな、
いや〜ちがうた、洗場の目、あひ傘でしッ
ぽりと、アし喜角がふるわいな、ぬれかゝる、
エー、やりとは気みぐかな、ちよと〜あう
てもゆか〜やんせ。

小唄 留めてもかゝる (本調子)

留めてもかゝる、留めても、ち〜のこひよ
こひよい、とんだ不首尾の、裏田浦、ふられ
ついで、エー、夜の雨。

小唄 止めては見たが (本調子)

止めては見たが、利かぬ氣の、歸りたいなら
かへらんせ、空はおぼろの、霧ぐもり、はるや
昔の喜ならぬ、月のないのに花のかけ、香
は見えねと香は移るその香につひうツとり
と、マア静かな晩だこと。

小唄 どうぞかなへて (二とり)

どうぞかなへてくださったんせ、妙さんへ願かけて
歸るみちにもその人に、あひたいみたい恋〜やと、
こゝちばひで先ヤからぬ、とんまら〜いぢやないかいな。

端唄 りんきらーい (本調子)

りんきらーいお、よう聞かーせんせ、思ひ痛に
なつたもおまゆき、志からーせんすな、わー
ぢやとそ、なんのー、言ひたいーとはない。

小唄 ぬれそ志つぽり (本調子)

ぬれそ志つぽり、打解け顔に、ふけた世帯
をーみぐと、子、憎らーい仇ーな夢に
結びしつがひの蝶々、すゑの末まで二人連れ
ぢやわいな、そーらばそーれどうなと縁手に
こちは何んでもかんでも、なんでもかまやせぬ。

小唄 王さんと (本調子)

王さんと、廊の浮名もたちやすく、風のうは
やゑ、うたそやつらや、流れの身こそ夜を花と
比喩異連理の二丁だち、とほーて雪の乳とはだ
こひの習ひのらあそ、おそいふ言はならやせぬ。

小唄 折よとも (本調子)

をりよともねぬ夜すがらや、ほととぎす、雨
屋にそつとふりかゝる、たれやらかどねおと
づれの、顔にてりそふ初誓。

小唄 降りそり (本調子)

をりそりそり花の巻りをあとにえそ山そりやれ
よか船にーよかだいかいはこちやきくらひ。

端唄 大津路 (二上り)

大坂を立ち退いて、美一の姿が目にまれば、かりかたに
身をやつし、おらの旅のたゆみも、輪の茶屋、五日三日と
日を送り、二十日あまりに四十兩、つかひ果して、系強る、
重故大子の、中兵衛さん、科人になら、やん、た、皆、あ
故さぞお復も、まぢやせうか、因念つ、じやとあき、あ、やんせ。

端唄 お互に (本調子)

お互に、おれぬが、花よ、世の人の、おれりや、互の、身
の、清まり、飽くまで、お前には、情、と、惚れたが、無理
か、ま、よんが、いな、ま、ふたが、むりか、る。

端唄 お前と一生暮らすなら (本調子)

お前と一生暮らすなら、深山の、おの、住居、建ひ
針は、車、線、車、細、流、川の、布、さ、ら、ら、糸、刈、る
手、業、も、い、と、せ、ぬ。

小唄 男がよそで (二下り)

男がよそで、そ、て、程、も、よ、そ、で、糸、の、よ、そ、で、働
き、振、も、よ、け、れ、ど、も、浮、き、来、さ、ん、す、が、玉、に、瑕、た、な
ま、ゆ、ん、せ、く、なん、の、い、の、ま、心、の、た、ま、を、い、を。

お伊勢詣り (本調子)

お伊勢詣りに、石部、の、茶、屋、で、あ、つ、と、き、ア、可
愛、い、長、右、衛、門、さ、ん、で、若、田、帯、め、め、た、と、き、ア。

お伊勢詣り (替唄)

お深久松聖崎の宿にいつたとき、駕と舟とを別れ
くよいつたとき、「久作お老のすゝり泣き。

小唄を——どり (本調子)

〽等々の、飛び立つほどに、おまゝども、飛ばれぬ
つらき待ちわびて、無理にあはせた置算、
志れて迷うて志れて煙爇に、歯のあとが、
夜あけの星の、二つ三つ四つ。

小唄われがすみ家 (三下り)

〽われが住家は、かこれごと、猫か三味ひく海が
うたふぶうたの面白や、これと思はば、やっくら
さ、浮氣おもはく、笠船にのせて、飛さまくら
に寝て、おろりよ、志よんがえ。

小唄わーが在所 (本調子)

〽わーが在所は、京の四舎の片ほとり、八瀬や大原に
半喫いそ、柴打盤、床几頭へ一寸乗せ、黒木買は
しやんせんかいな、柴買はしやんせ、エ、エ、

瑞唄秋も (本調子)

〽秋ものと思はかるも、年の雪、恋の書荷を肩にかけ
いもがり行けば、冬の夜の川舟、さくら舟、舟へ
身につらき置炬燵、美にやるせが、ないわいな。

端唄 私が園さ (ニより)

へわしが園さぞ、見せたいものは、昔の谷風いま仔細
違模模ゆかり憶かり宮陣聖信夫浮れまい
ぞへ松島ほろり、しよんがえ。

端唄 わーが回ひ (ニより)

へわーが思ひは三國一よ富ま深ま心空積りわ
するとも解けはせぬ、浮えまつかや、まつかや浮え
今はもうなのためのもうれー人の心は相縁奇縁
いっせつ命も遣る氣にたわいた。

端唄 我が恋は (ニより)

へ我が恋は、住吉浦の妻茶をむ、たいあをーと
まらばのり、まっは憂いものつらいもの。
へ我が恋は、細谷川の丸木栲、渡したや、わ
たらあは、おもふお方に逢はりやせぬ。
へ我が恋は、人こそ知らね冬の夜に、おもひ詰め
たる厚氷、解けてたのーむ下ろろ。
へ我が恋は、着成徳にひけー剃刀のあじもせたや又
切れもせず、寝ぢやないそえ生ごらー。
へ我が恋は、松島沖の夕景を、たぐあそーと
松ばのり、これが恋やらたすけやろ。

端唄 書き送る (本調子)

書き送る文もーどなき、彼名書の抱りて
寝よとのおきこそて岩に堰かれて教る波の雪か
みぞれか雲か雪か解けそ皮路の二つ文字夫
とあーと暮あそて暮らすよ。

小唄 かくらくり (本調子)

かくらくりのぱつと変りーお前の心かげで縁
引く人があつ。

小唄 さらかさ (二上り)

さらかさの骨はばらく 残や破れても離れ
〜まいそ〜ふる掛。

小唄 桂川 (本調子)

桂川 お半をせなに長右衛門、肩にかけたる、
ふり袖もはや五月の岩田帯、だが無理かそ。

小唄 垂て手袋 (本調子)

垂て手袋と、わーや知りながら、くどきよき手に
つい来せられて、だまされて、さく、室の梅。

小唄 扇

車

(本調子)

裸道中は彌次様でござる、川を越そとて扇
車、ピヨコリ〜と扇車。

上ぢや甚多ハ北島でござる、歩け彌次さ
ん、ハイヒードウ、ピヨコリ〜と扇車！

端唄 重ね扇 (本調子)

重ね扇はよい辻石よ、あたり志ツほりたま柏
菊の花ならいつまでも、活けて眺めてゐるこ
ころ、色も香もある、梅の花。

小唄 川

風

(本調子)

川風に、つひさそはれて、涼み船、もんくも
どろろかくせつ〜で粹なすたれのゆめ音に
浅水てきこゆる風びきあ、いまな世界に照る
月の中を流る〜墨田川。

端唄 川

舟

(本調子)

川舟の浮名を流す多き〜も菊は離れぬ
碁碁の仲にまっ月すじ〜と別れの幸らさ
に袖〜ぼる、ホント遠く旅がたいわいな。

端唄 煽 幅 (ニトリ)

へ煽幅が、出て来た浪の夕涼、川風さつと、おく
ほたん、かろい仕掛のるも男、いなさぬ〜いつ
までも浪花の水に、うつす姿え。

端唄 海晏寺替唄 (布調子)

へアレ見や〜やんせ海晏寺ま〜よ龍田か高尾でも
及びないぞ〜紅糸がり。

へアレ君や〜やんせ清玄は破れ衣に破れ笠、之れも
誰れ故々〜くらひぬ。

替唄

へアレ待た〜やんせ歸るならま〜よ浮名が立つとて
も歸さないぞ〜氏の雨に。

替唄

へアレ軍か〜やんせ、虫の聲、ま〜よ松虫終せ地と
及ばないぞ〜三つ力。

端唄 香 水 (布調子)

へ香水の蓮、床〜き髪、の毛を捲き上げ〜ま〜
横振に〜やんせ、窓もる月の顔どれが女か男や
らあかぬ、窓の梅柳、くい仲ではないかいな。

端唄 宵にまち (本調子)

宵にまち、夜中にらがれ、めくる涙、せめて夢
にとひぢまきくら、アレ早やかま、いさめいさ、ほんに
あんなきな、くしぢやいな。

端唄 淀の川瀬 (二より)

淀の川瀬のなア、草をよと、山所に引いて、登るヤンレ
三十石舟、流き流れを汲む、舟車迎ぐる、留るいと
はみな水、割れ梓、さいたさかつき、おさうてすけりや、解
さ伏るへ、管巻き、隠よ、かゝた所か、子雨、松、ヨイ
くくく、ヨイくくく。

小唄 興作おも(ば) (二より)

興作おも(ば)、照る目もくもる、はいつく、どろ
く、はいつく、関の小舟が、涙の雨よ、ほとと
ぎす、アレナほそん、かけたか、そちや二世、かけたえ。

小唄 手枕 (二より)

手枕や、ちまをながめの、旅の中、意業なお方
の、おたうづれ、やうすが、いそは、ないかいな、ほんに
のんきな、夕ざくら。

端唄 高砂 (ニ下り)

へ高砂や、高砂や、此浦船に帆を巻けて、月詣共に出汐の浪の澄海を島影や、遠く鳴るの沖道きて、早や候の江に着きにけり。

端唄 竹にちりたや (ニ上り)

へ竹にちりたや、紫竹だけ元は尺八中は笛末はともちの笛の軸、思ひまゐらせ候り、それそれそらちや。

端唄 玉川 (本調子)

へ玉川の水に晒せ、雲の糸、積る口渡の其内に解けし山田のもつれ髪、思ひ出さず忘れず、にまた来る事を待つぞ。

端唄 竹に雀 (本調子)

へ竹に雀は、ふよくとまゐる、やそとまゐらぬは、色のみち、わたしばかりが情たて、おらふおかたのつらに、こや、ヨイ、ヨイ、ヨイヤサ、それえ。

小唄 辰巳やよいとこ (三下り)

辰巳やよいとこ、素足が少く、羽織やお江戸の
ほくりもの、ハ幡籠が、鳴るはいな。

小唄 飯山節 (二上り)

浮世離れてゑ大山すまゐ、恋も悟るも忘れてゐたが
唐の唄も降りきれば、昔が恋も一もならぬ。逢ひ
たまたに見たきに来いせんす

小唄 空やえ (本調子)

空やえーくくもらるー中降らる、雨はほれやう
ぬぬえ、濡れてゑもます青柳のまもつれが氣にかゝる。

瑞唄 空ほの暗き (本調子)

空ほの暗き、東雲に、木の骨がこれの時、髪
ほつれをかき上げる、櫛の滴かーづくが露か、ぬれ
て嬉しき、今朝のあめ。

小唄 ぞめき (二上り) 佐藤 熱之雨 詞

ぞめきにこんせ浪花津へ飛弾の玉みぢらや
あるまいーきだてのよーあー見てかゝる。

小唄 つがひ離れぬ (二上り)

つがひはなれぬ、さきーどりも、ちよつと古いドや
ないかいな、春は花、秋の月ほどまんまるな、
あだな浮世にすみだ川、よいのせこー、あだな
くーうき世にすみだ川。

端唄 隠は上意 (本調子)

〜網は上意を家りて羅生門へと来りける。折しも
雨の烈下き後より胃のしころ捲いつかみ引戻さん
疾と引く程も軍ゆる強者としてのみ曲者に諸手を掛
け止しやれ放しやれし。さか切れる。しころ切れるは厭ひは
せぬが、たつた今終つた髪元の毛が振ふるは。七つ過ぎには
行かおはならぬ。其所へ行かんすが、此方や氣にかる誰し
やい。鬼トやないもの。しよものサツサ胃も。しころもど
つちも。おらネーサツサ持つてけ替戻つてけ。

端唄 辻 君 (本調子)

〜辻君の、隠ぬ流れの思ひ川、恋には細る柳蔭暫
しとめたま。三日月の、様もむねへ。小夜風た、さくらりと
解けし。洗ひ髪、寝んで泣きぬの音。

端唄 露は尾花 (本調子)

〜露は尾花と寝たと云ふ、尾花は露と寝ぬと云ふ、あ
れ寝たといふ、寝ぬといふ、尾花が穂に出て現はれた。

小唄 月はやちれど (本調子)

〜月は冴れど心はさそぬぢやないかいな、真に惚れては
夜も目もあかぬいそ、浮氣がよいさ。これはのさ
さ、よいや。

小唄 寝ながらに (本調子)

〜寝ながらにさせるであける、遠子宮あれんや
ーやんせらるる。附を離れやせぬ。

小唄 涙か〜〜て (二上り)

涙か〜〜て送りだす二階座敷でゑてゐたら
一足づつに遠くなるも目列終まがり角そ
れ〜〜そ〜ちやいな。

小唄 無理な首尾 (本調子)

無理な首尾して出先から用事をつけそ
逢ふ夜さは枕も邪魔と引寄せそ顔につめ
たま前髪の月ぢやせそせん〜ろ〜と鳴鳥。

端唄 むつ〜〜て (本調子)

勃然とて歸れは門の古柳に曇りし袖を春雨
にまた晴れてゆく月の影がなほ籠にしてほ〜や。

小唄 虫の音

虫の音をとめてうれ〜き庭づたひ、あ
くる禁打戸相一糸、五〜にくら〜い程
の空、月は〜よんぼり〜くもがくれ。

端唄 宇治は茶所 (本調子)

宇治は茶所さまがまに中に噂の大雪山と人の氣
に合ふ水に合ふ、あかも香もある濡れた同志粹な
浮世に野暮らういこちやうい茶の中やもの。

端唄 浮名立と (本調子)

浮名立と口先で故とけなある時は
狗で惚けも知らぬ顔するまふならぬはぼん
にふるさい人の口。

端唄 うす墨七 (本調子)

うす墨に書く玉章の思ひして雁啼き返る宵
やみに月影をうで、まさんに焦れて思ひ病を覺
算思ひ廻して信ならぬ早く苦界を脱かしく。

小唄 浮世離れて (三上り)

浮世離れてる奥山住居恋も悟業も忘れてみた
が麻の啼く聲きけば昔がらひいわいな。

端唄「運」とまよふこと (本調子)

運とまよふこと二瀬川、瀬されぬ糸で瀬され
末は那となれ山となれ、私と思ひは君放ならば三又
川の流の中心の支けをおん家。

端唄「梅」にも喜 (本調子)

梅にも喜あももそへて、若水汲むか車井の音
せけきる追ひや、朝日に一げき人影をも一やと
思ふ喜の想、遠音かぐらぬ敷とりの待つてうら
や嵐なき、逢うと娘一き五椀端。

小唄「浮氣同志」 (本調子)

浮氣同志がつかうなつてあ、でもないと四畳半
湯のたぎるより音もななくあれ軍かーやんせ松の風。

小唄「梅は白ひよ」 (本調子)

梅は白よ木立はいらぬ人は心よ姿はいらぬ。

小唄「梅と松」 (本調子)

梅と松とや若井の手に手引かれて七子之錦り
なうらは嘘ドやないぞ、穂俵は老の徳とや子代までも
白髪よソ、夢の中よいふゆすり糸のてともマア
わけまては目と度い喜ぢや。

小唄裏のせどや (本調子)

重祇のせどやに、ちよいと竹うゑて、
やうに、ちよいとたけうゑて、すゝめとんまら、
ゆちゆらのちゆ。

小唄 梅は咲いたが (本調子)

梅は咲いたが、梅はまだかいな、柳やなしく、
山吹や浮葉て、色ばかり、よんかいな。

端唄 上り下り (本調子)

上り下りのおお、お馬よ、さても、
いなア馬子衆の、高聲で、
扱は、
扱は、

小唄 雲にかけは (本調子)

雲にかけは、かすみにも、
惚れま、いものか、ほれ、
快間になつた、

端唄 口説 (本調子)

口説、
終い、
の後、

小唄 草の葉 (ニトロ)

草の葉にとまり〜葉は二匹と〜めて葉の
葉も葉と〜れぬ。

端唄 槍は結びても (本調子)

槍は結びても名は結びぬ昔忘れぬ落〜差
子よア〜い〜い〜い〜い〜い。

小唄 野暮な屋敷 (本調子)

野暮な屋敷の大小揃てて襦も身軽な町屋
よ〜い〜い〜い〜い〜い。

端唄 柳橋から (本調子)

柳橋から小舟でゑかかせ山崎塙土まの夜風が
ぞつと舟に〜む衣紋坂君を思〜は逢はぬ昔か
ま〜ぞか〜かた〜い〜い〜い〜い〜い
う初音を〜り〜き〜に〜来た。

端唄 八重一重 (ニトロ)

八重一重、山も嶺に存に粧、娘等〜はぬい様衣
宵に敷〜そ〜ま〜らん〜に〜逢〜あ〜生中〜あと口惜む
恥か〜い〜ではないかいな。

小唄 やくのはおぼる (二上り)

やくのはおぼるぞ知りながらあの忘られぬ甘口に餘
所でもそれと胸の針嬉しがるせそ深ぢやぞえ。

小唄 登台ばやー (三下り)

登台ばやーのうちこみば先づ神樂ばやー、
聖天鎌倉おほまーやうでん、あとは四下目で、
てんすててんすとどんくおひやりひやり、
とろいやいとろる笛の聲、まきまぢや、あとまぢや、
ともに打込むチャエンチエチエチあたり証。

小唄 待ちわびてねる (本調子)

待ちわびて、寝るともなまにまともみし、枕に
かよふ鐘の音も夢か現か、うつしかゆめか、覺
めそなみだのそをたもと、あれ村雨がふる
わいな。

小唄 待てと云ふなら (三下り)

まそといふなら五年はおろか柳新芽の枯れ
るまでとかく浮世は系敷どなのほほんで暮るやんせ。

端唄 今朝の別れ (本調子)

今朝の別れにまの羽織がひくれんば雨があん
なに降るわいなま田みなまかたくと鳴く蛙。

小唄 筆のかさ (本調子)

筆のかさ、筆しそ待の夜のかやう火に、さらど吹
きくる子、涼風や、碓入汐もすおな夜に女な
み男なみのめをとなか、夜つかれぬ夜はなほ恋し
また、わかぬ時をおもひやる。

端唄 更けて逢ふ夜 (本調子)

更けて逢ふ夜の氣苦方は、人目をかわて松子
先、互にえ合はす顔とかほ、目にもつ涙袖濡れ
て、ふ、意地あるなまの用心はなす、後、後やせん。

小唄 船にせんどう (本調子)

船にせんどう、さ、やいて、今朝の出潮に首ッ
たけ惚れて通(ば)、千里も一里ぢやえん。

小唄 おらり (本調子)

おらりとては、おれども瓢箪は、へうげて丸く世
間をわたる、身は店借の氣をえん、は、月雪花
のさくさげん、内で樂—みそ—てまた、胸子は
おやんとおめく、り。

端唄 心でとめて (三下り)

心でとめて返す夜は可愛いは方の為にもな
ろと泣いておれて、またげんもじ、ちよきあ
角田、夜露に濡れてあとはもの憂き獨寝
すゝい、いが苦界の真中かいな。

端唄 紺の前かけ (三下り)

紺の前かけ松葉を染めて、まつにこんと
は糸にわく。

端唄 御所車 (二上り)

香に迷ふ梅が軒端に、にはひき、花に逢瀬を
待つとせめ、明けてうた、懸想文、并くはつ音
のはづかしく、まだとけおぬる宿水、雲におもひ
の、おかきよ、百夜も通ふ、恋の園、君がなまけの
か、わあ、床の、まくら、序、夜もすがら。

小唄 しばれ松葉 (本調子)

しばれ松葉はあやかりものよ枯れておちても
女夫づれ。

端唄 恋〜 (本調子)

〜恋〜 しが終癪とまり胸に差〜 此空の月
今に來るかを待つ身は知れ待たぬ一筋ほろとぎす。

今宵は雨 (三下り)

〜今宵は雨か月々々子かたまそいづるおぼる夜に、ゆる
覚悟の移うち、林にもやひし、首尾の松。

小唄 小諸出て見よ (本調子)

〜小諸出て見よ 淡間の山で、けとよけむらが
三すぢ三つ、やれよいせ、よんやせ。

小唄 縁かいな (本調子)

〜夏の源は雨國の出舟、舟形舟、あかる流星
星しり、玉座が取持つ、縁かいな。

小唄 海老の子 (三下り)

〜海老の子は生れながらに髪長く、獨に梓の弓
を張り、月は出目で目出、夜かりける、次芽なり。

小唄 青柳 (三下り)

〜青柳の蔭に誰やらゐる、わいな、なぢやいせせん
おぼる月夜の影法師。

端唄 秋の夜 (本調子)

秋の夜は長いものとはまらん丸な月見ぬ人の心かも
更けて待てども来ぬ人の音するものは鐘ばかり、
数ふるゆびも寝つ起きつ、わーやてらされで居るわいな。

端唄 秋の野に出て (三上り)

秋の野に出て七草見れば、サアヤレ、露で小禱が
みな濡れる、サアよーてくんな鬼薊。

端唄 浅くとも (本調子)

浅くとも浅き流れのかきふはた、飛んで行き来
の濡れつばぬ、のそいで来たか彌笠を、顔は月夜
うはないかいな。

端唄 あごで知らせて (三下り)

腮で知らせて、目で受けて必ずやいのと、約
束したに今に於いて、首尾の問合もな、こ
とか工、まくならぬこそ、浮世、夢中、あはれ世界。

端唄 五月雨や (二上り)

五月雨や、空にひと聲、ほと、びる、晴れて漕ぎ出
す本母寺の園庭はなれて、後継の半田の森を横に
見て、越ゆる間もな、堀切の喧やぐーや、のあやめぐさ。

端唄 五月雨に (本調子)

五月雨に池のまゝに水まゝといづれがあやめ
かきつばたさだかにそれと吉原へほどろつからぬ女神
の離れ座敷の夕ぐれにふる涙んかはす留士流波。

端唄 橋見よとて (三下り)

橋見よとて名を付けそ、先づ朝さくら夕橋
よい夜橋も冒夫の書下りゆとそ、どうなと首
尾して逢はせけんせ、何時じゆひけ過ぎぐりや
たそやし燈ちらりほらり鉄棒奥へ。

端唄 笑いた橋 (本調子)

笑いた橋の本にコリヤ、駒の手調を一つか
ほらけぬやうに括り付け、駒がわらうを振るめ美
事にういた橋の花が教る、美事の中に笑いた橋の葉
花教る、美事にういた橋の花が教る。

笑いた橋になせ釣つなく、大べらぼうな心なしくそぞ
もつてこゝろが勇めは、ソレハエ、花が教る。

小唄 土薩摩サ (ニより)

土薩摩サ、りやサ土薩摩と急いでおせど汐がサ
こりやサそりうて溜がまたぬ。

小唄 山名の小舟 (本調子)

山名の小舟ついたくおついた待乳山風を扱
でしのぐ雨か雲か儘りく今夜もあつたの
げんも居残りけせう生薑酒。

小唄 三下り

春風にそよそあがりし奴用骨が折れよか碎けよか
ハヤレコリヤ人の一やこりちや切れはせぬ。

端唄 さんさ時雨 (三下り)

さんさ時雨か、萱屋の屋根か、青もせてま
て濡れかゝる志よんがいな、めでたいく。

小唄 西りさん (本調子)

西りさん初めて東へ下る時星の衣に竹の杖唐靴
ほどな叩き足ちきちやんちきちきく南無阿弥陀

小唄 坂は照る (本調子)

坂は照るく終座はと雲の土山雨が降る。

端唄 紀伊の國 (布調子)

紀伊の國は、青雲川の水上に立たせ給ふは新玉
山祇堂十二社大明神、さて東國に玉りては玉
姫稲荷が三圍へ狐の嫁入お荷物、擔ぐは強
力いなり様、頼めば田所の袖摺が、差詰今宵
は待女郎、仲人は生崎まつ黒な、九郎助稲荷
につままれて、子まで生きたる信田妻。

端唄 君は今頃 (二より)

君は今頃、さう御形あたり鳴りそあかせし山
ほろきす月の頼をりや思ひ出す。

小唄 伽羅のかほり (三より)

伽羅の音と、この君様は幾夜とあてもわや
とあおぬ寝ても覚めてもさくられぬ。

端唄夕

夕ゆふ (本調子)

夕暮に眺めらんあかぬ陽田川月つぎに風情を
待乳山うたい帆かけた船かえゆるそへ、アレるが
啼なとるよゑの、みせにゑ所ところがあるわいな。

小唄雪のあーた (本調子)

雪のあーたの、あまほらけ、浪花の浦の雪
帆かたほ、ゆきうの、船ぞ、たよりすこ、あた
わかーそみるわいな。

端唄 夕ゆふ 立たち (三下り)

夕立や田をいぬめぐるの神ならは音あを浪の
洗あらひ軽かろさがきくそ、狐きつね奉ほうほんに金かね生せい老ろうな
いそぢやいな、坂さかの舟ふねやの舟ふね屋やの人ひとと、雪ゆき子こるる。

端唄 夕ゆふ 張月はりづき (本調子)

夕張月ゆふはりづきのかけくらく、かよふありーそ思しんで下くだけは、
おきつゑらなみたつた山やま、夜半よるには君きみかひとく、あらむ。

小唄雪の達たつ度ど (三上り)

雪の達たつ度どに岩いわ園えんの氷こ昇のぼ解とけて流ながるる雪ゆき夜よ。

小唄 雪は巴 (本調子)

雪はともよに降りあくる、屏風が恋の中だ
ちで、煉と子多の三ッ角園、元本に歸る樹
多、まだ口青いぢめないかいな。

小唄 雪のあした (本調子)「お伊勢詣り」替唄

雪のあした、兩國橋、讀んだとさア、歌で原
五、あ、ほんまの心が、知れたとさア、あした待
たさ、寝、給。

小唄 夕 立 (三下り)「三日月」替唄

夕立の、あまり強さた、すゆやどり、年を
かりようか、こゝろあまほりか、まよよこゝろあま、
ぬれてゆこころ。

端唄 めぐるる日 (本調子)

めぐるる日の喜にいとて老木の梅も若やぎそふ
くほろーやー 董ア、床しとほち飽きそふ
さ、鳴きかける雪の来ては朝寝を起しけりさ
りとは糸短な今帯、みそけりわいなほりほけ
ま、あーといふ人、さんぢめ。

小唄三つの車 (二より)

三つの車に法の道、火宅の門や出ぬらん、そら
出た、生を盡なんそは、おほこはや、身の憂きに
に人のうらみはなんのその、わたしの思ひは
こはいそよ、なそと法息所がおつうすま
そ、漸能が、りぞ、おっやいましたとサノ
ウマクサンマダ、バサラマダで、ヤシレ身を焦が
したとサ、又、悟氣に、重袋や、罪なもの。

小唄三日月 (三より)

三日月の老り出ぬ向にちよとかけしだす悪の
習ひか人目が邪魔か曲る横丁の柳蔭。

三日月 (替唄)

夕まの、あまり強きに、一寸かけいたす命をかりよ
うか、暗れまを待とうか、まよ、よ、あま、ねれて行く。

小唄三子歳 (本調子)

へる途はねおは千日の思ひもつもるまきの夜の静かに
更けを深えかへる、まよ、まよ、まよ、まよ、ふ袖屏風入屋の
窓の睦言も、清き、灯影に波うたす、隙間をもる
ぞおろし。

小唄 みなころゝに (本調子)

みなころゝに、三つの鱗と名も真時が、うか
れ天狗の酒盛に、祇園豆腐の回樂舞は、
さすが日本にたぐひなき。

小唄 都

鳥 (本調子)

都鳥、ながれによとむ、燈籠の、よさく風
に、何ぶく、なみの早瀬の、みづ清く、ころ
墨河のかぢらまくら。

小唄 水の出花 (本調子)

水の出はなと二人が仲は、せかれあはれぬ身
の因果、たぐとなたの、意見でも思ひお
もひまいる氣は更にない。

端唄 志賀の唐崎 (本調子)

志賀の唐崎ひとつ松夜毎々々に、泊り
鳥が輝れ来るを、阿呆々々と嬉し涙の乾
く宵も曇りがちな夜雨。

端唄 思ふ恋路 (本調子)

思ふ恋路は、よそはかたよよ今交逢ふのが命
かけよ子涙のおもいも、その顔かくす無程な道。

小唄 一と聲 (本調子)

ひと聲は、月が啼いたかほと、ぎすいっつゝか
志らむ短夜に、また寝もやらぬ手枕や、
男ごころはむごころい、女ははらうじや
ない、かたよき逢はねばくごごくと思ふ恋な
やうだが、泣いて居るわいな。

小唄 びんのほつれ (三下り)

びんのほつれは夜風のとがよそれをお前にうたぐ
られ勤めぢやえ、苦界ぢやゆるーやんせ。

小唄 びんとすねては (本調子)

びんとすねてはまた笑ひがほ苦界かせたり
泣かせたり色の中、苦界の世界。

小唄 せかれく (本調子)

せかれくく、てくよく、苦界すえたまに道な夜
はせかれては苦界あふてはせかれ別れもなないぬの終。

396
537

端唄 粹ふ浮世 (本調子)

〜 精な浮世を恋故に形義に着らすも心がら、梅
が香添ゆる春風に二枚屏風を押隔て能月夜
の薄ゆり思ひ思んぞ相惚れの口後は床の涙
雨池の蛙も夜子すからうんは泣くではないかな。

端唄 好いた同志 (本調子)

〜 好いた同志が、つい期うなつて、あつてもないと四
畳半、滑たざるより音もなく、アレ軍か
あやんせ、松の風。

昭和十四年十月三十日印刷
昭和十四年十二月十日發行
東京市麹町區内幸町一丁目東拓ビル
發行兼編輯人 川 添 利 之 吉 甚
印刷所 馬 場 己 之 吉 甚
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二
印刷所 大日本印刷株式会社
神奈川縣川崎市久根崎二五番地
發行所 株式会社日本書籍商會

終

